

予定のもので、その第1巻目が昨年末に出版された。著者は現在、苔類分類学の第一人者と目される人物で、マサチューセッツ大学の教授である。非常に精力的に仕事をすすめ、最近は南半球の苔類に関し非常に興味ある論文を次々と発表している。内容は、北米大陸のうち、東経100度以東に産する苔類を扱っているが、今回出版された第1巻では、苔類学全般の問題が論じてあり、むしろ苔類学教科書となっている。同じようなものに、ヨーロッパの苔類を取扱かった K. Müller の *Lebermoose Europas* があるが、内容的には K. Müller をしのぐ本となっている。又、北アメリカの苔類については Frye & Clark の *Hepaticae of North America* があるが、これは最早や古典と呼ばれるものであって、今日的な意味はない。第一巻の内容は大きく2つに分れるが、初めに105頁にわたって苔類学関係の文献が上げてある(大体1963年まで)。1) General treatment では苔類の形態、細胞学、進化、系統などが論じられ、(2) では Specialized morphology and taxonomic treatment として、*Jungermanniae* の形態とコマチゴケ目、ウロコゴケ目のうちマタゴケ亜目、テガタゴケ亜目のものが論ぜられている。第2巻以降ではこの他の分類群が取扱われる予定である。専門の苔類学者で、しかも現在もっとも精力的に仕事を進めている著者が書いた本である点、各所にユニークな新見解が示されていて面白い。苔類学者のみならず、苔類の系統論に興味のある方はこの第1巻は見逃すことのできない本である。

(井上 浩)

○高等植物分布資料 (54) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (54)

○シコタンヨモギ *Artemisia laciniata* Willd. 本種は欧亜大陸の亜寒帯に広布し、近接地域では朝鮮半島北部、樺太、南千島に知られている。日本では北海道しかも礼文、利尻の両島と根室、知床半島先端部とに産するに過ぎない。この点はグイマツが樺太と南千島とに隔離分布しているのと軌を一にするものである。以上の産地は何れも海岸の台地草原や崖らしいが、ここに少し内陸部で北海道本島第3の産地が分った。十勝広尾郡大樹(タイキ)町の上更別(カミサラベツ)で、京大の岡本省吾氏が1963年9月3日に採集された(MAK-61987標本)。ここは泥炭原野が拡がり、*Betula fruticosa* Pall.に近似のヤチカンバの基準標本産地でもある。要するにグイマツやヒメオノオレ(広義)(ヤチカンバとして存在するが)の如き、東亜北部の要素で東北海道に隔離分布するという種類に1例を追加することになる。

○チサンウシノケグサ *Festuca ovina* L. var. *chiisanensis* Ohwi 西日本に普通なアオウシノケグサに似ているが、葉に縦溝があるので区別され、四国の山に知られるのみであった。これも横内氏が木曾谷上松(アゲマツ)町小川の750~900mの地(東経137°40')で採集された(1966年7月8日)。葉の側面の溝は浅いが、十分に認められるのでチサンウシノケグサと同定した。(東京都立大学 牧野標本館 水島正美)